

## W01a MAXI による軟X線新星 MAXI J0126–745 の発見と 10 年間に発見されたブラックホール天体

根来 均, 中島基樹, 丸山和貴子, 小林浩平, 青木真凜 (日大), 岩切 涉, 佐々木 亮 (中大), 芹野素子 (青学), 三原建弘, 中平聡志, 松岡 勝 (理研), 河合誠之, 大枝幹 (東工大), 上田佳宏 (京大), 志達めぐみ (愛媛大), 山岡和貴 (名大) 他 MAXI チーム

軟X線新星 MAXI J0126–745 は、2019 年 6 月 1, 2 日に SMC X–1 から約  $1.3^\circ$  離れた領域で MAXI/GSC により検出された (Negoro et al. ATel. #12833)。GSC の観測でのピーク強度は 2–4 keV で  $24 \pm 5$  mCrab であったが、GSC の検出限界以下となった 3 日に Swift/XRT により行われた追観測では検出されなかった。検出されなかった原因としては、XRT による観測が GSC による位置決定の誤差領域の 6 割強の範囲であったことから、XRT の視野外であった可能性や、新星の爆発初期を初めて捉えた軟X線新星 MAXI J0158+760 (Morii et al. 2013, ApJ, 779, 118) と同様な、1 日以下のタイムスケールでの急激な減光による可能性が挙げられる。

一方、この 1 年間のうちに MAXI が発見した、MAXI J1631–479 (小林浩平らの講演) と MAXI J1348–630 (大枝幹らの講演) がその後の観測によりブラックホール天体である可能性が極めて高くなった。その結果、この 10 年間で MAXI が発見した銀河系内のブラックホール (候補) 天体の数は、2004 年から観測を始めた Swift 衛星を抜いて、歴代単独 2 番の 12 個となった。(1 番は、1995 年から 17 年間稼働した RXTE 衛星の 15 個。)

講演では、MAXI J0126–745 のほか、GRS 1915+105 (Iwakiri et al. ATel. #12761, 12787) や AT Mic (Sasaki et al. ATel. #12748) からの巨大フレアの検出など、2019 年度前半の MAXI による速報の報告とともに、MAXI により発見された 12 のブラックホール天体の特徴と発見の意義について議論する。